

日本史 A、日本史 B

第 1 高等学校教科担当教員の意見・評価

日 本 史 A

1 前 文

今年度の追・再試験「日本史 A」は、高等学校学習指導要領（以下「学習指導要領」という。）の目標に沿い、基礎的・基本的な学習内容を問う作問がなされた。

以下、今年度の追・再試験の問題について(1)～(4)の視点で分析を行った。

- (1) 学習指導要領（標準 2 単位）に準拠し、教科書の内容や授業実態に即した形式・難易度・内容の問題であったか。
- (2) 「日本史 A」設置の趣旨を生かした「世界史的視野に立った理解」や「歴史的思考力」を評価する問題であったか。
- (3) 項目別・分野別出題範囲のバランスが取れていたか。
- (4) 出題方法や表現などが適切であったか。また、60 分の試験問題としてふさわしかったか。

2 試験問題の設問形式・分量・難易度・出題範囲

追・再試験の設問形式（表 1）

（ ）内は配点

設問形式	平成 27 年度	平成 26 年度	平成 25 年度
正しい事項（人名・語句など）を選択	0 題（ 0 点）	0 題（ 0 点）	1 題（ 3 点）
誤った事項（人名・語句など）を選択	1 題（ 3 点）	0 題（ 0 点）	0 題（ 0 点）
二つ以上の事項（人名・語句など）の組合せ	11 題（ 32 点）	6 題（ 17 点）	11 題（ 31 点）
正しい文章を選択	7 題（ 21 点）	9 題（ 26 点）	9 題（ 27 点）
誤った文章を選択	0 題（ 0 点）	2 題（ 6 点）	3 題（ 9 点）
二つ以上の文章（正誤）の組合せ	11 題（ 33 点）	14 題（ 42 点）	7 題（ 21 点）
古いものから（年代）順に配列	4 題（ 11 点）	3 題（ 9 点）	3 題（ 9 点）
	34 題（100 点）	34 題（100 点）	34 題（100 点）

追・再試験の難易度（表 2）

丸数字は「日本史 B」との共通問題

	問題番号	問題数	前年比
難しい問題		0	- 1
やや難しい問題	3、8、⑫、18、⑰、⑱、㉓、28、30、31、32、33	12	- 5
標準的な問題	2、5、6、7、⑬、14、15、17、㉒、㉔、㉕、㉖、27、29、34	15	+2
やや易しい問題	1、4、9、⑩、⑪、16、㉔	7	+4
易しい問題		0	± 0
難易度指数（難しい順に 5～1 の指数を与え、平均値を算出）		3. 15	- 0. 32

（委員の合議により、教育現場における授業の実態などの観点から、難易度を 5 段階に分類した。）

追・再試験の時代別・分野別出題範囲（表3）

○は2点問題、□が3点問題

区 分		政 治	外 交	社 会 経 済	文 化	史料・グラフ 地図・図版等	問題数 (配点)
歴史と生活	衣食住の変化						0題（0点）
	交通・通信の変化		2		① 3		3題（8点）
	現代に残る風習と 民間信仰						0題（0点）
	産業技術の発達と 生活						0題（0点）
	地位社会の変化						0題（0点）
19世紀の世界 近代日本の形成と	国際環境の変化と 幕藩体制の動揺	4	5				2題（6点）
	明治維新と近代 国家の形成	9 11 12 14 15		6		7 17	8題（24点）
	国際関係の推移と 近代産業の成立		18	10		13	3題（9点）
	政党政治の展開と 大衆文化の形成				8 16 21		3題（9点）
国際関係 近代日本の歩みと	近代産業の発展と 国民生活			20			1題（3点）
	両大戦をめぐる 国際情勢と日本	27	19 28	23		22 29	6題（17点）
	戦後政治の動向 と国際社会	25 30 33	34	32		24 31	7題（21点）
第二次世界大戦後 の日本と世界	経済の発展と 国民生活						0題（0点）
	現代の日本と 世界		26				1題（3点）
問題数（配点）		10題（30点）	7題（20点）	5題（15点）	6題（17点）	6題（18点）	34題（100点）
平成26年度		13題（38点）	3題（8点）	10題（30点）	3題（9点）	5題（15点）	34題（100点）
平成25年度		8題（22点）	2題（6点）	8題（24点）	5題（15点）	11題（33点）	34題（100点）

- (1) 設問形式では(表1)、昨年度と比べ「二つ以上の事項(人名・語句など)の組合せ」の設問が6題から11題へ増加し、昨年度多かった「二つ以上の文章(正誤)の組合せ」の設問が14題から11題へ減少した。昨年度あった設問形式の若干の偏りが、本年度は修正されたと言える。
- (2) 全体の分量は、大問6題、設問34題で、昨年度と同様である。また、第3問と第5問の計12題(35点)が「日本史B」との共通問題であった。全体として適切な表現・分量であった。
- (3) 難易度については(表2)、昨年度の難易度指数3.47が今年度3.15となり、易化したと分析できる。「やや難しい問題」が5題減少し、「やや易しい問題」が4題増加したことが要因であると考えられる。そのため本試験「日本史A」(難易度3.29)よりもやや易しかったと推測される。また「日本史B」との共通問題12題についても「難しい問題」「やや難しい問題」が昨年度よりも1題ずつ減少した。
- (4) 出題範囲を項目別・分野別に見ると(表3)、「外交」に関する出題が4題増加し、「社会経済」に関する出題5題減少した。それ以外は、昨年度とほぼ同様であった。また19世紀前半から1980年代までと学習指導要領の範囲内で出題され、おおむねどの項目からもバランス良く出題された。

3 試験問題の内容・表現・程度

第1問 「日本史A」の主題学習である「交通・通信の変化」をテーマとした問題

博物館を訪れた高校生の会話形式のリード文から、「交通・通信の変化」を考察させる問題。

問1はやや易しい問題。**ア**・**イ**は、リード文からも正答は容易。問2は標準的な問題で、正確な外交史の知識が必要。問3はやや難しい問題。Yの大学令の正確な理解が必要。

第2問 幕末から明治前期の政策に関して、リード文や史料から多角的に問う問題

Aはリード文から「政治」「外交」「社会経済」を読み解く問題。問1はやや易しい問題。

リード文の「幕臣」「政商」から正答を導くのは容易。問2は幕末の外交史の基本を問う標準的な問題。問3は標準的な問題で、明治政府の基本的な経済・産業政策の知識が必要。

Bは「徴兵告諭」の史料を基に、幕末から明治前期の「政治」「文化」に関する問題。問4は標準的な問題。「版籍奉還」の理解と、史料読解力を試す良問。問5はやや難しい問題。細かい「文化」の知識が必要。問6はやや易しい問題。選択肢の内容からも容易に正答が可能。

第3問 明治期の日本の「電信」の整備に関する、「日本史B」第5問との共通問題

問1はやや易しい問題。リード文の「生糸」からも正答は可能。問2はやや易しい問題。

「日比谷焼打ち事件」の理解から正答は可能。問3はやや難しい問題。多様な法制度の知識が必要。問4は地図を用いた標準的な問題。X・Yとも地名の特定が容易で、配置からも判別は可能。

第4問 明治期の演劇をテーマとし、「政治」「外交」「文化」を問う問題

Aは明治期の歌舞伎と政界に関するリード文を読み解く問題。問1は標準的な問題。士族反乱に関する基本的な知識で正答が可能。問2は標準的な問題。政党に関する基本的知識が必要。

Bは、明治期の政治と演劇・歌謡についてのリード文を読み解く問題。問3はやや易しい問題。明治期の文芸は苦手な受験者が多いが、選択肢やリード文から正答は容易。問4は標準的な問題。「国会期成同盟規約」は、なじみが薄い史料であるが、史料を丁寧に読み解くことで正答に至る良問。問5はやや難しい問題。明治期の東アジア外交の正確な知識が求められる。

第5問 大正から現代までの音楽に関するリード文を用いた、「日本史B」第6問との共通問題

Aは第一次世界大戦後から昭和初期までの西洋音楽に関するリード文を読み解く問題。問1はやや難しい問題。この時期の外交の正確な知識が必要。時代観を問う良問。問2は標準的な

問題。甲・乙の図版ともに基本的。問3はやや難しい問題。Xの選択肢は、判別がやや難しい。

Bは昭和初期から戦時下の文化活動に関するリード文を読み解く問題。問4は表を用いた標準的な問題。産業別の男女別有業者人口の変遷から、基本的な時代観を読み解く問題。問5はやや難しい問題。戦時中から戦後にかけての国民生活に関連する正確な知識が求められる。

Cは占領期以降の、音楽活動の普及・発展に関するリード文から読み解く問題。問6はやや易しい問題。選択肢の判別は容易である。問7は標準的な問題。誤文の判別が容易である。問8は標準的な問題。基本的な公民の知識からも判別は可能である。

第6問 政治家芦田均に関するリード文から、「政治」「外交」「社会経済」を問う問題

Aは芦田均の戦前の政治活動について読み解く問題。問1は標準的な問題。**ア**・**イ**とも基本的な知識で正答は可能。問2はやや難しい問題。犬養～広田内閣の「政治」「外交」の正確な理解が必要。問3は地図を用いた標準的な問題。開戦に至る外交の基礎知識が必要。

Bは占領期の芦田均の政治活動について読み解く問題。問4はやや難しい問題。占領期の内閣の正確な知識が必要。問4は図版を用いたやや難しい問題。戦前～戦後の「社会経済」の知識と、図版読解力を試す良問。問6はやや難しい問題。戦後復興への正しい知識が必要。

Cは戦後の芦田均の政治活動について読み解く問題。問7はやや難しい問題。戦後の政党、内閣史の正確な知識が必要。問8は標準的な問題。戦後の基本的な「外交」の理解が問われる。

4 要 約

前文で述べた(1)～(4)の視点についての意見・要望を記すことにする。

- (1) 今年度の「日本史A」の追・再試験は、表2の難易度を基に本試験と比較した場合、全体としてはやや易しい内容であった。選択肢も、本試験と比べると、同一項目・同一分野内で、基本的な知識を問い、判別が容易な問題が多かった。出題範囲は適切であった。今後も作問に際しては学習指導要領に準拠した作成をお願いしたい。
- (2) 「世界史的視野に立った理解」という観点では、外交分野からの出題が増加し、より「日本史A」の趣旨に沿った内容であった。「史料・グラフ・地図・図版等」を用いた設問は、例年並みの出題数であった。図版や史料を活用した問題は、歴史を多面的に考察する上でも重要であり、史料の注やリード文を更に工夫した上で、今後も重点を置いて出題してほしい。また、地図を用いた問題が今年度は、複数出題された。地図問題は歴史の時間的・空間的理解を問う問題で、歴史的思考力を試す出題形式であり、今後も重点を置いて出題してほしい。
- (3) 分野別では全ての分野でバランス良く出題されていた。項目別に見た場合も、バランスが良かったと考えられるが、全体的には項目・分野を横断した幅広い思考・判断を求める設問が、本試験に比べるとやや少なかった。また、昨年度、選択肢に登場した「三浦環」「川上音二郎」が、今年度はリード文中に登場している。文化史分野等の、非常に限定された人物・用語を複数年度続けることは、出題内容のバランスという点で再検討をお願いしたい。
- (4) 出題方法や表現については、バランスの良い設問形式での出題となっている。第5問、第6問は、正答を導くには図版・史料・注などの総合的な理解が必要で、歴史的思考力が試される良問が多かった。出題数は昨年度と同様34題で、60分の試験問題として適切であった。

日本史 B

1 前 文

今年度の問題について、本試験に準じて次のように分析した。

- ① 要求されていた知識は、おおむね「基本的な事項・事柄」であり、各時代の特徴及び歴史的
事象の推移・変化、あるいは背景を理解していれば正答を導くことができる適切な構成であっ
た。
- ② 一見難しそうに思える設問にも、リード文や設問文に正答を導くための配慮がなされていた。
- ③ 資史料は多くの教科書に掲載されているものが使用されていた。初見と思われる資史料につ
いても、丁寧に「資料をよむ」ことで判断できるよう配慮されていた。

上記①～③について、今後も作問の在り方に継続して反映していただくことを強く希望したい。

(注) 文中で具体的に取り上げる際は、解答番号で表記した。 例 15 = 解答番号 15 の設問

2 内 容・範 囲

例年どおり、高等学校学習指導要領（以下「学習指導要領」という。）の目標に即しての出題であ
った。なお、文中の「 」内は、学習指導要領からの引用語句である。

(1) 出 題 傾 向

時代別では、昨年度は古墳時代以前からの出題が皆無であったが、今年度は原始から現代までバ
ランス良く出題されている。一方で、現代については、図版を年代順に配列する設問であった6を
含めるならば4題となり、問題数としてはやや多い印象を受ける。ただし、範囲としては占領期から
1980年代までを扱っており、偏りのない出題であったと評価できる。

分野別で見ると、外交に関する設問が減少した（表1参照）。学習指導要領が重視する「東ア
ジア世界」を意識した出題も7だけである。科目の目標に「世界史的視野に立って総合的に考
察させ」とある。外交に関する設問数及び内容を検討していただきたい。

(2) 「歴史の考察」を意識した出題

第1問は、「時代ごとに区切らない主題」が設定された出題であり、高校生が日本における椅
子の歴史をテーマに語り合うというユニークな内容の会話文がリード文であった。設問は文化に
関するものが多かったが、「イ歴史の追究」の狙いに沿ったものであった。

(3) 理解力・歴史的思考力を重視する姿勢

ポスターを年代順に配列させる6は、時期の判別に必要な文字を鮮明に読み取ることがで
き、「基本的な事項・事柄」を基に考察させる良問であると評価できる。23は、史料文言を参
考に正答に導く構成となっており、資史料を活用して「歴史的思考力」を測る良問であった。

(4) 内容の取扱い

第6問には、「歴史上の人物の果たした役割や生き方などとかかわらせてとらえる」と、「政治
的、経済的な条件や国際環境など時代的背景とかかわらせてとらえる」という二つの観点が盛り
込まれており、学習指導要領に沿った出題として評価できる。また、音楽が戦時下に国民生活の
統制に利用された一方で、敗戦後には不安と虚脱感を感じる人々を励ましたことを述べたリード
文からは、出題者のメッセージが感じられた。「民主的、平和的な国家・社会の一員として必要
な自覚と資質を養う」という教科の目標について、再認識を促すものとして受け止めたい。

時代別・分野別出題傾向（表1）

表中の白抜き数字は各2点、それ以外は各3点

区 分		政 治	外 交	社 会 経 済 交 通	文 化 思 想 宗 教	資 史 料 図 絵 地 図	出題数・配点 () 内は26年度 [] 内は25年度
原始・古代	先土器・縄文時代						9 題 24 点 (6 題 17 点) [7 題 20 点]
	弥生時代		7			8	
	古墳時代	2 9					
	飛鳥～白鳳時代	10					
	奈良時代			5			
	前期	11					
中世	平安時代						7 題 20 点 (6 題 17 点) [8 題 22 点]
	中期	12				3	
	院政時代	14 13				18	
	前期			15			
	鎌倉時代				1		
	後期						
近世	南北朝時代			17	16		6 題 17 点 (10 題 27 点) [8 題 21 点]
	前期						
	室町時代						
	後期						
	織豊政権時代						
	前期	22			20		
近代	江戸時代						11 題 30 点 (11 題 30 点) [11 題 31 点]
	後期	21			19	23 24	
	明治時代	4 27		25 26	31	28	
	後期						
	大正時代		29			30 6	
	前期					32	
現代	昭和時代						3 題 9 点 (3 題 9 点) [2 題 6 点]
	大戦期			33			
	戦後～占領期	35	36		34		
	高度経済成長期						
	～現代						36 題 100 点 (36 題 100 点) [36 題 100 点]
	27年度出題数・配点	12 題 34 点	3 題 8 点	6 題 17 点	7 題 19 点	8 題 22 点	
	26年度出題数・配点	10 題 30 点	5 題 11 点	8 題 21 点	6 題 18 点	7 題 20 点	
	25年度出題数・配点	8 題 21 点	6 題 17 点	9 題 26 点	6 題 16 点	7 題 20 点	[36 題 100 点]

3 分量・程度

問題数は昨年度の追・再試験、今年度の本試験と同様に大問6題、小問36問であり、ページ数も昨年度と同じ30ページ（本試験28ページ）であった。また、各小問で提示される選択肢や組合せ問題の文章等、解答に関わる文章が2行にわたるものは17文であり（昨年度18文、本試験21文）、文章の正誤を選択する形式の10問については、選択肢の文章が全て2行にわたるものはなかった（昨年度1問、本試験2問）。ゆえに分量としては昨年度追・再試験及び今年度本試験と大差なく、60分という試験時間も勘案しても、適当であったと判断したい。

試験問題の程度に関しては、昨年度に引き続き「基本的な事項・事柄」を問う出題が中心であった。**25**は、(『長野県＝製糸業』と即座に連想できない受験者にとっては、リード文中の「生糸」を頼ることになるが)生糸を生産するのは製糸業なのか紡績業なのかという、正に基本中の基本とも言える問いであり、歴史用語の一問一答式学習に勤しんできた受験者には醒覚に値したと思われる。また、明治期の法制を扱った**27**、及びヴェトナム戦争の軍事拠点を取り上げた**36**は、昨今の改憲論議や沖縄米軍基地論争ともあいまって、前者は「様々な法制の特色」を、後者は「世界の中の日本」を受験者に意識させる契機となった。

4 表現・形式

(1) 設問形式

設問を形式により分類すると表2のようになる。昨年度の8問から5問も減少したのは、正しい文章の組合せを選択する形式である。反対に関連事項の組合せを選択する形式は、2問から4問に倍増した。ただ、これらは一昨年度（前者は2問、後者は4問）と同等数であり、今年度の特徴的な変化とすることはできないと考える。

文章の正誤の組合せを選択する形式の**32**は、掲げられた統計表内に空欄を設けた意欲的な設問であり、「客観的かつ公正な資料に基づいて」「戦時体制の強化」を意識させ、「歴史的思考力」を試すという、学習指導要領に沿った方向性が顕示された。加えて、年代配列を選択する形式の**10**、**14**は、事象の変遷を俯瞰し「時代ごとに区切らない主題を設定し追究する」ものとして評価できる。

設問形式（表2）

表中の白抜き数字は各2点、それ以外は各3点

設問形式		平成27年度		平成26年度
		問題数	問題番号	問題数
事項（人名・単語）を選択する形式		0		0
文章の正誤を選択する形式		10	3 、 4 、 5 、 9 、 11 、 15 、 17 、 21 、 27 、 33	11
二つ以上 文章の組 み合わせ	空欄を補充する形式	7	1 、 7 、 13 、 16 、 19 、 25 、 34	5
	文章の正誤の組合せを選択する形式	7	2 、 18 、 23 、 26 、 30 、 32 、 36	5
	年代配列を選択する形式	5	6 、 10 、 14 、 22 、 29	5
	正しい文章の組合せを選択する形式	3	12 、 24 、 35	8
関連事項の組合せを選択する形式		4	8 、 20 、 28 、 31	2
		36		36

(2) 表現

19では高橋景保、**28**では田中正造といった人名をあえて明示せずにその業績のみを掲げ、それぞれ高橋至時の活躍、足尾銅山の地点を問う設問であった。これは「歴史上の人物の果たした役割や生き方」に留意させる効果を生むに相違なく、受験者には刮目に値したと思われる。

一方で[14]においては、地下請に「百姓請」の語が括弧書きで付記されることが望まれる。そもそも選択肢の文の正誤判定が求められる箇所ではないが、これは多くの教科書に掲載される語である。昨年度、元寇の際の石築地に「防塁」の語を補っていただいたように、配慮を頂ければ幸いである。

なお、第1問のA、B文は「資料をよむ」ことで「衣食住の変化」「習俗」に言及する、特筆すべき会話文であった。構えない態度の高校生のやり取りが綴られており、正に時宜を得て受験者の緊張をほぐすユニークな表現も見られた。重大な責務を負う^{きょうじ}矜持の上にも、受験者の目線を取り入れていただいた問題作成部会の心配りに、感謝と畏敬の意を表したい。ただ、そうであるだけにB文にある「低廉化」は、高校生の会話では多分に口にされない語であるため違和感を生み、文全体の重石となった。一考をお願いしたい。

(3) 図表や写真等の扱い

史料・写真・表・絵図・地図等は15点（9箇所）を数え、昨年度の11点（8箇所）や本試験の9点（8箇所）より多く掲げられた。資史料等を活用した設問は、「多面的・多角的」な見方と「歴史的資料の特性に着目」する機会を供すると言え、その増加は好ましい傾向である。中でも地図は、「地理的条件などに関連付け、世界の中の日本という視点から理解させる」上で有用であるものだが、今年度は2点提示された。昨年度は出題されなかったことを踏まえれば、前進と判断して良い（一昨年度も2点）。

史料として『広益国産考』が掲げられた[23]では、正解に至るにはその内容の読み取りが不可避であり、丁寧に読解することの重要性を再認識させるものとして歓迎したい。その上であえて求めるならば、受験者の意欲の喚起及び基礎知識の確認のためにも、教科書で見慣れた史料の活用を願うところである。

5 要 約

(1) 高等学校の授業への影響

「時代ごとに区切らない主題を設定し追究する学習」に関わり、工夫された出題が見られた。日本人の生活文化について、椅子を事例に、時代背景や社会状況、対外交流などとかかわらせての出題は、身近な事象から歴史を考察させる授業に通底するものであると考える。

また、近現代の音楽について、戦争、文学、産業などに関わらせて生活文化を考察させる出題が見られた。授業では、音声や動画（映像）資料更にはフィールドワークなどを用いて歴史への関心を高めることができるであろう。資史料に基づく歴史像の構築の重要性が改めて認識された。

(2) 意見・提案等

会話文や生活文化を素材として工夫された出題は、取り組みやすい良問であると評価できる。グローバルな視点で歴史を考察することの重要性を強調するならば、地図なども用いて、外交を軸とした出題が増えることも望ましいと考える。